

令和2年度第1回紫波歴史研究会講座資料

日時：令和2年10月18日

会場：紫波町長岡公民館

盛岡城跡の石垣と長岡の石切丁場

似内啓邦



盛岡城跡二ノ丸西側の貞享三年普請石垣

•

盛岡城跡の石垣と長岡の石切丁場

1 盛岡城跡の地形的特色と歴史的背景

(1) 地形的特色

岩手県盛岡市は、北上盆地の北部に位置する県庁所在地である。北上盆地の中央を貫流する北上川は、盛岡城跡の南方約550mで雫石川、中津川、北上川が合流して水量を一気に増加させ、宮城県石巻市で太平洋に注いでいる。

藩政時代には、盛岡を基点として仙台領石巻まで舟運が開かれており、北上川は沿岸部などからの物流の集積する商業地として発展してきた。

盆地の西側には、県境となっている奥羽山脈、東側には沿岸部との境となる北上山脈が連なり、盛岡以南の地域は、北上川西側に広い平坦地や段丘や扇状地が形成されており、東側は北上川近くまで北上山地から派生した丘陵が迫り、段丘面や平坦地は比較的狭い。

また、盛岡以北の地域は、北上川東岸地域に山地性の地形が発達し、西側には岩手山からの噴出物で形成される火山灰砂台地が広く形成されている。

盛岡城跡は、市中心部の内丸に所在し、旧北上川と中津川の合流点に突出する花崗岩の転石や風化した真砂土を含む赤色風化土の小丘陵に築かれている。盛岡市の北上川以東は古生代に位置付けられ、四十四田丘陵とよばれる花崗岩帯が広く分布しており、盛岡城跡やその周辺は、石垣の石材として使用された密度が高い硬質の花崗岩が多く産出される丘陵地帯にある。

現在の北上川の流路は延宝元(1673)年の河川改修により大きく西側に変えているが、当初は現在の盛岡駅東側の開運橋付近から大きく蛇行しながら盛岡城に突きあたって南流していた。



第1図 盛岡城跡の惣構

城の本丸が位置する丘陵頂部は、北上川と中津川の河床との比高差が約20mで、現在のよう
に高層の建物が建築される以前は、城下から北側の岩手郡南部、南側は志和郡まで良好な眺望
が開けた場所であった。城の北側は、近世以降に平坦な台地に開拓されて北側の丘陵へと連続
している。この方面には、盛岡城の遠曲輪が存在した地域であり、北上川の河床との比高差は
3～6mほどである。また、西側の中津川対岸の地域にも堀が巡らされており、南側の北上川
の河床面とは比高3～4mの段丘で画されている。

(2) 歴史的背景

盛岡城の築城は、天正19(1591)年、九戸合戦の終結後、南部信直(南部家26代、盛岡藩初代)
が豊臣家の軍監浅野長政を見送る際に、長政から不來方(盛岡)の地に新城を築くよう勧められ
たことによる。その後、慶長2(1597)年に信直の嫡男利直を総大将として鋤始の儀を行い、築
城が開始されたとされている。なお、盛岡市では醍醐の花見での築城許可の記事をもって慶長
3(1598)年を築城開始としている。盛岡城は、慶長年間に一応の完成をみたが、本丸と二ノ丸
以外の三ノ丸や淡路丸などの石垣は未着工であった。

元和3(1617)年から城全体の石垣普請が行われ、同5(1619)年には北上川に接して浸食を受
けていた二ノ丸西側を除く石垣が完成した。その後、寛永10(1633)年に3代重直が入城し、以
後歴代藩主の居城として明治維新まで続いている。

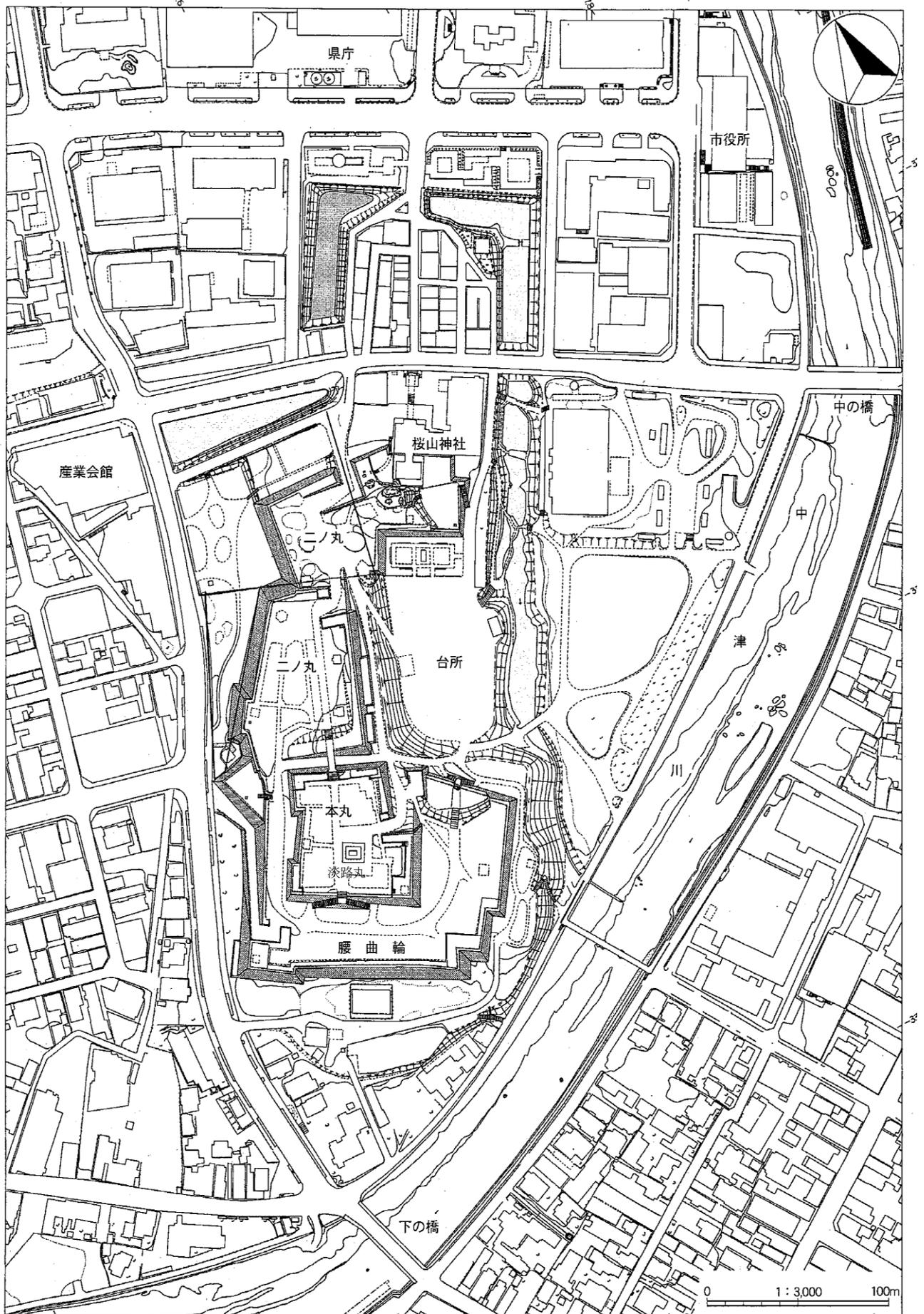
延宝元(1673)年に城西側の北上川を切り回し、貞享3(1686)年に二ノ丸西側の土手に石垣が
構築され内曲輪の石垣が完成している。以降、安政3(1856)年まで維持のための修復が続いた。

明治元(1868)年以降、盛岡城の全てが新政府の直轄地となって兵部省が管轄し、明治5
(1872)年以降は兵部省から機構を変えた陸軍省が引き継いだ。廃藩置県によって名実ともに城
主をなくした城地は荒城と化し、その後全国289の城館とともに建物撤去が検討され、一時は
保存措置とした全国44の城に含まれたが、老朽化による維持経費の負担ができないことを理
由に明治6(1873)年に城内の建造物や樹木の払い下げが布告され、明治7(1874)年に台所内の
建物等を除く内曲輪内の建物と多くの樹木が一般競争に付されたが、旧藩主や家臣などから保
存運動は起こらず、主要な建物は撤去された。

明治23(1890)年、陸軍省から南部家へ内曲輪の全てが縁故を事情として有償で払い下げを受
け、明治36(1903)年に岩手県が内丸にあった狭隘な内丸公園の代替と日清・日露戦争や飢饉で
喘いでいた窮民救済の一環として公園整備計画に着手し、明治39(1906)年に南部家から30年
間無償貸与を受けて、同年広く県民に供するための「岩手公園」が開園した。

昭和9(1934)年、岩手公園は南部家と県との貸借契約が満期となると、盛岡市に移管され、
盛岡市は南部家から土地を購入して公有地化を進めたが、内曲輪の北西部の一部は民間に売却
されている。翌10(1935)年、盛岡市から文部省に史跡指定の申請が行われ、「今濠湟石壁土塁
尚ヨク存シ奮規模ノ見ルベキモノアリ」との理由から、昭和12(1937)年4月17日付けで国の
史跡に指定された。

昭和57(1982)年、築城400年近くを経て変位の著しい石垣修復を行う方針が決まり、昭和
59(1984)年から修復に伴う事前の発掘調査に着手して、現在まで本丸・二ノ丸・三ノ丸・淡路
丸・吹上門下の石垣修復を行ってきている。今後は整備基本計画に基づき、三ノ丸北西部の石
垣修復を計画している。



第2図 盛岡城跡

(3) 盛岡城跡の概要

(1) 所在地

盛岡市内丸 57 番地 1 外 98 筆, 指定面積指定面積 84,092.04 m²

(市有地 80,520.68 m²(91%), 神社所有地 5,855.94 m²(7%), 民有地 1,648.54 m²(2%))

(2) 立地

旧北上川と中津川の合流点に突出する花崗岩の転石や風化した真砂土を含む赤色風化土の小丘陵

(3) 形態

平山城

(4) 機能の存続期間

慶長 3 (1598) 年(同 2 年説あり)から明治 7 (1874) 年(建物解体)まで

(5) 特徴

内曲輪は、本丸から二ノ丸・三ノ丸へと段差下がり連郭式の総石垣を志向し、織豊系の城郭構造と縄張と共通する構造で各曲輪は水堀(一時は空堀)と土塀で区画される。

また、この外側に重臣屋敷を取り込む外曲輪、さらに社寺や商工人町を取り込んだ遠曲輪により区画され、梯郭式を呈する。

(6) 規模・構造

東西約 1,100m, 南北約 1,300m, 面積約 1,385,000 m²

(7) 城主・石高

盛岡南部氏・10 万石→20 万石(文化 5 (1808) 年)

(8) 現存建物

彦蔵(雑蔵, 旧御城内から移築し, 淡路丸下の南側に現存)

(9) 部材使用建物

佐藤家(徳清倉庫御殿座敷・蔵), 報恩寺山門, 清水寺山門, 木津屋土蔵, 浜藤酒造土蔵等

(10) 岩手公園開園

明治 39 年 9 月 15 日(原設計 長岡安平), 平成 19 年愛称: 盛岡城跡公園

(11) 国史跡指定

昭和 12 年 4 月 17 日

(12) 都市計画決定

昭和 31 年 5 月 14 日(面積 9.9h), 同年 10 月 15 日(「総合公園」として開設, 面積 8.7ha)

(13) 管理団体

盛岡市

(14) 主な計画

ア 史跡保存管理計画 平成 23 年度, 盛岡市(都市整備部)

イ 史跡整備基本計画 平成 24 年度, 盛岡市(都市整備部)

ウ 史跡植栽管理基本計画 平成 28 年度策定中, 盛岡市(都市整備部)

表1 盛岡城跡関係年譜

年号	西暦	主 な で き ご と
天正10年	1582年	南部信直, 三戸城主となる
天正18年	1590年	信直, 秀吉から南部七郡を本領安堵される
天正19年	1591年	九戸合戦。浅野長政, 信直に不來方への居城移転を勧める
慶長3年	1598年	盛岡藩初代藩主南部信直, 醍醐の花見において築城許可を得たとされる
慶長14年	1609年	中津川に上ノ橋を架ける(同16年中ノ橋, 同17年下ノ橋)
元和3年	1617年	盛岡城大修築開始。前田利家家臣の内堀伊豆頼式が奉行頭として指揮
元和5年	1619年	盛岡城修復成り, 盛岡藩二代藩主利直福岡城から移る
寛永10年	1633年	盛岡藩三代藩主南部重直, 盛岡城完成。盛岡城に入城
寛永13年	1636年	本丸に落雷あり。三重櫓ほか消失し, 重直が郡山城に移る
寛文7年	1667年	3月26日付 御新丸居間前石垣組仰付
寛文7年	1667年	8月15日付 石垣石材, 志和郡長岡から船で運ぶ
寛文7年	1667年	8月27日付 郡山城破却
延宝元年	1673年	北上川の切り回しの許可を受ける
延宝6年	1679年	郡山御殿取毀材木にて御末方普請
貞享3年	1686年	二ノ丸西側の石垣の完成
宝永元年	1704年	大地震により本丸の壁及び石垣が崩れ破損する
宝永2年	1705年	三ノ丸北西部北面の石垣修復完了
天保13年	1842年	本丸三階を天守とよび改める
弘化3年	1846年	承慶橋完成
安政2年	1855年	本丸冠木門番所わきの石垣修復(江戸時代での石垣修復最終記事)
明治元年	1868年	12月 盛岡藩降伏。兵部省の所管となり, 松本藩・松代藩の取り締まりとなる
明治2年	1869年	7月 盛岡に復帰, 再び13万石の居城となり, 中ノ丸に盛岡藩庁が置かれる
明治3年	1870年	廃藩置県により盛岡県となる。中ノ丸に県庁が置かれ, 10月には遠曲輪・外曲輪の外堀・土塁が払い下げられて埋め立てられる
明治4年	1871年	1月 全国的に廃藩置県が命じられる
明治5年	1872年	1月 岩手県となり, 6月には陸軍省(兵部省明治5(1872)年2月に廃止)
明治7年	1874年	3月 本丸・二ノ丸・三ノ丸・その他建物, 城内の樹木が払い下げられ陸軍省が管轄
明治22年	1889年	5月 南部家から陸軍省に対し, 払い下げ依頼状(明治7年以降は荒廢地)
明治23年	1890年	3月 南部氏が国から有償で縁故払い下げを受ける
明治24年	1891年	城内の杉, 松, 御用ノ松, 栗, 胡桃, 桜, 雑木, 樺本, 合計1304本売却
明治36年	1903年	12月 岩手県が南部家から盛岡城跡を借用して公園整備する案を提出
明治39年	1906年	3月 南部利淳と押川則吉知事との間で「土地使用貸借契約書」締結(46,077㎡)
明治39年	1906年	4月 凶作による窮民救済事業(労役扶助)で, 公園として整備に着手
明治39年	1906年	9月 「盛岡城跡二造営シタル縣公園ハ巖手公園ト称シ本月十五日開園ス」
明治41年	1908年	9月 南部利祥伯爵銅像除幕式
昭和9年	1934年	12月 県から移管を受けた盛岡市が南部氏から敷地を買収して管理を行う
昭和12年	1937年	4月 国の史跡に指定される(文部省告示第212号)

(4) 盛岡城跡の石積みの画期と特徴

(1) **第1期(築城期)**＝慶長3(1598)年～, 打ち込み接, 算木積の発達段階, **乱積A・A'**

ア 構築場所＝本丸(新規), 二ノ丸南東部, 中ノ丸(新規), 主要な虎口(新規)

・本丸北東・北西の出角, 南西の出角内部, 本丸・二ノ丸間の廊下橋下, 二ノ丸北東部・北西部, 三ノ丸不明門西側の石垣下部に残存＝A。矢穴長：9～

11 cm。

・本丸北西部の地中部分上部(改修), 二ノ丸南部の廊下橋(改修), 二ノ丸東部南半部(改修)＝A'。矢穴長：10～13 cm。

イ 特 徴＝築石の大半が野面石で, 石材の長く広い面を表にし, 控えが短い。石垣1石の積み上げごとに栗石と盛土を交互に重ねる。

(2) **第2期(改修～完成期)**＝元和3(1617)～元和5(1619)年, **乱積B**

ア 構築場所＝本丸南西部を除く全域(改修), 二ノ丸南東部の上部(改修), 三ノ丸南東部の上部・南東部から東・西部(新規), 淡路丸北東部から東・西・南西部(新規)

イ 特 徴＝築石や角石に不整形な割り石を主体的に使用。控えは長い。石垣構築時, 1・2石ごとに大ぶりの栗石で盛土の境界を階段状に明確にする。矢穴長 14～22cm。これまでの石垣修復は, 本丸南西部を除いてこの乱積Bが対象。

(3) **第3期(整備期1)**＝元和6(1620)年以降。 **乱積C**。矢穴長 14～17cm。

ア 構築場所＝本丸天守台北西隅(改修), 二ノ丸南東隅角部(改修), 三ノ丸瓦門南東部入角部(改修)

イ 特 徴＝築石や角石に小形の矢穴の石材を含み, この角石下には根固め石を構築。

(4) **第4期(整備期2)**＝寛文8(1668)年～貞享3(1686)年以降, **布積A**

ア 構築場所＝本丸南西部(改修), 二ノ丸西部(新規), 榊山稻荷曲輪(新規)

イ 特 徴＝石材の表面が50～60cmの方形で, 控えは100～120cmの規格材。築石・角石の表面は丁寧に鑿整形される。石垣は乱積より急勾配で, 石垣上部1/4はほぼ直立する寺勾配となる。矢穴長 5～10cm。二ノ丸西部(貞享3(1686)年3月の奉行銘)

(5) **第5期(修復期)**＝宝永元(1704)年～宝永7(1710)年, **布積B・布積B'**

ア 構築場所＝本丸南西部(改修), 二ノ丸北東部(改修), 三ノ丸北東部北面(改修)

イ 特 徴＝本丸南西部と三ノ丸北西部北面は乱積Bの石材を転用した布積みと二ノ丸東面北半部と淡路丸西面とは規格材で構築した布積みに分かれる。角石は鑿整形された直方体で角石は特に細かい。築石の間詰石は布積Aに比べて多い。控えは60～80cmほどであるが, 長軸を表に向ける石材もあり, 変位の要因とも考えられる。矢穴長 5～6cm。

本丸南西部では根石に根固め石が認められた。三ノ丸北西部北面(宝永2・1705)年9月の奉行銘)。また, 淡路丸北西部(本丸門下)の御乗物部屋の石垣は, 布積Bより鑿整形が行き届き, 石材が規格化された布積B'がある。

(6) **第6期**(維持管理期1)＝元文5(1740)年以降, **布積C**(補修石垣)

ア 構築場所＝淡路丸南側中央の二箇所(新規)

イ 特 徴＝いずれも補修石垣で, 淡路丸南西部及び南東部では掘り込み事業の底面に栗石を敷き詰めた上に根石を構築し, 築石や角石は粗く分割した不定形な石材を用いた布積。間詰石が多く, 内部は栗石が充填されており, 上面には捨石列がある。**矢穴長 5～6cm。**

(7) **第7期**(維持管理期2)＝延享元(1744)年～延享4(1747)年, **布積D**(補修石垣)

ア 構築場所＝二ノ丸東部二箇所(新規), 淡路丸南東部・南西部(新規)

イ 特 徴＝延享元年に城下南東の日蔭山から切り出し, 翌年から構築。**矢穴長は 6～7cm。**で, 表面は鑿整形されている。間詰石は少なく内部には栗石が充填されている。なお, 南西部では1期の堀を埋めており, 石垣補強のため構築した可能性がある。

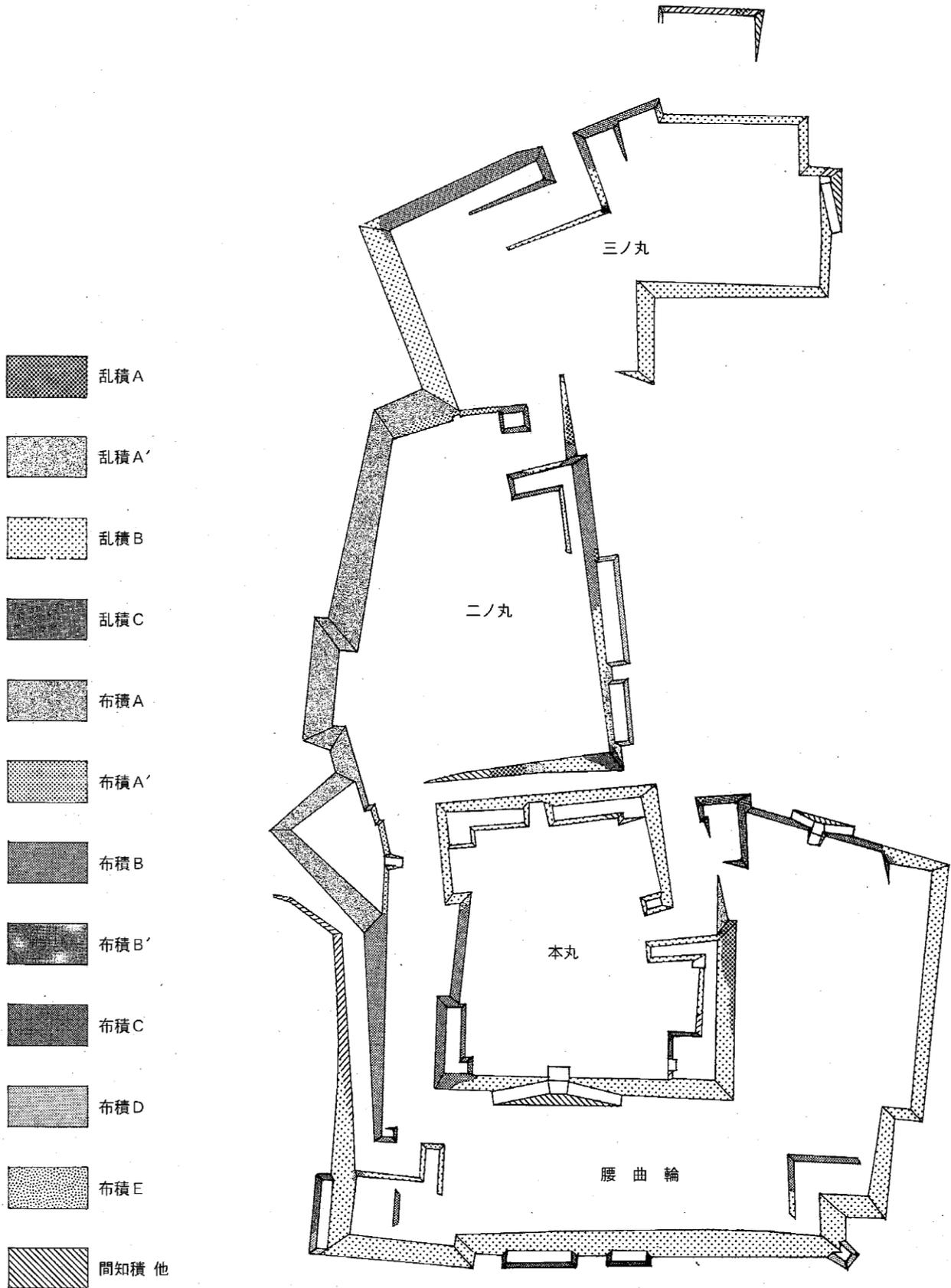
また, 二ノ丸南東部の補修石垣は現状で存在していないが, 明治6年の図面に描かれていることから, 明治6年から明治39年の間に撤去された。

淡路丸南部の西側から二箇所目の補修石垣は絵図には描かれていないものの, 存在することから明治期以降に構築された可能性がある。

(8) **第8期**(改変期2)＝明治期, **間知積**

ア 構築場所＝本丸天守台階段・北側の石土居内側・本丸南部中央, 三ノ丸東部中央, 淡路丸北部中央, 吹上門坂, 櫻山神社拝殿北側(新規改変)

イ 特 徴＝公園開園に伴って付設された階段や坂道。表面が長方形で控えが四角錐に加工した石材を矢羽状に落とし込んで構築する。盛土は厚いが裏込は薄い。**矢穴長 4～5cm。**



第3図 石垣の分類と変遷

2 石垣普請と石切丁場

(1) 用語の整理

(1) 盛岡城跡

城や施設として機能していた期間は盛岡城。機能が失われた明治7年以降は盛岡城跡。
文化14(1817)年に「南部領」から「盛岡領」に変えるとある(「盛藩年表」)。「藩」の名称は幕末に呼称されたもの。※ただし、呼称の違いは研究目的の違いによる場合や「盛岡」・「八戸」・「七戸」の一族を総括した範囲として「南部」として扱う場合がある。

(2) 範囲

江戸時代の志和郡のうち長岡は、現在の東長岡・西長岡・山屋・舟久保の範囲をいう。

(3) 石切丁場

- ・石切丁場：文化財ほか広く一般に用いられている名称
- ・石丁場：文化財の指定名称。例：大坂城石垣石丁場跡、東六甲石丁場跡(国指定)
- ・石場：伊東市宇佐美ナコウ山山頂付近一帯に「羽柴越中守(細川忠興)石場」の標石あり。江戸時代に用いられていた名称
- ・石切場：石材業界で一般に用いられている名称

(2) 普請の工程

- (1) 石切：受持区域・工区を指す丁場。宿・鍛冶場・休息場を伴う。

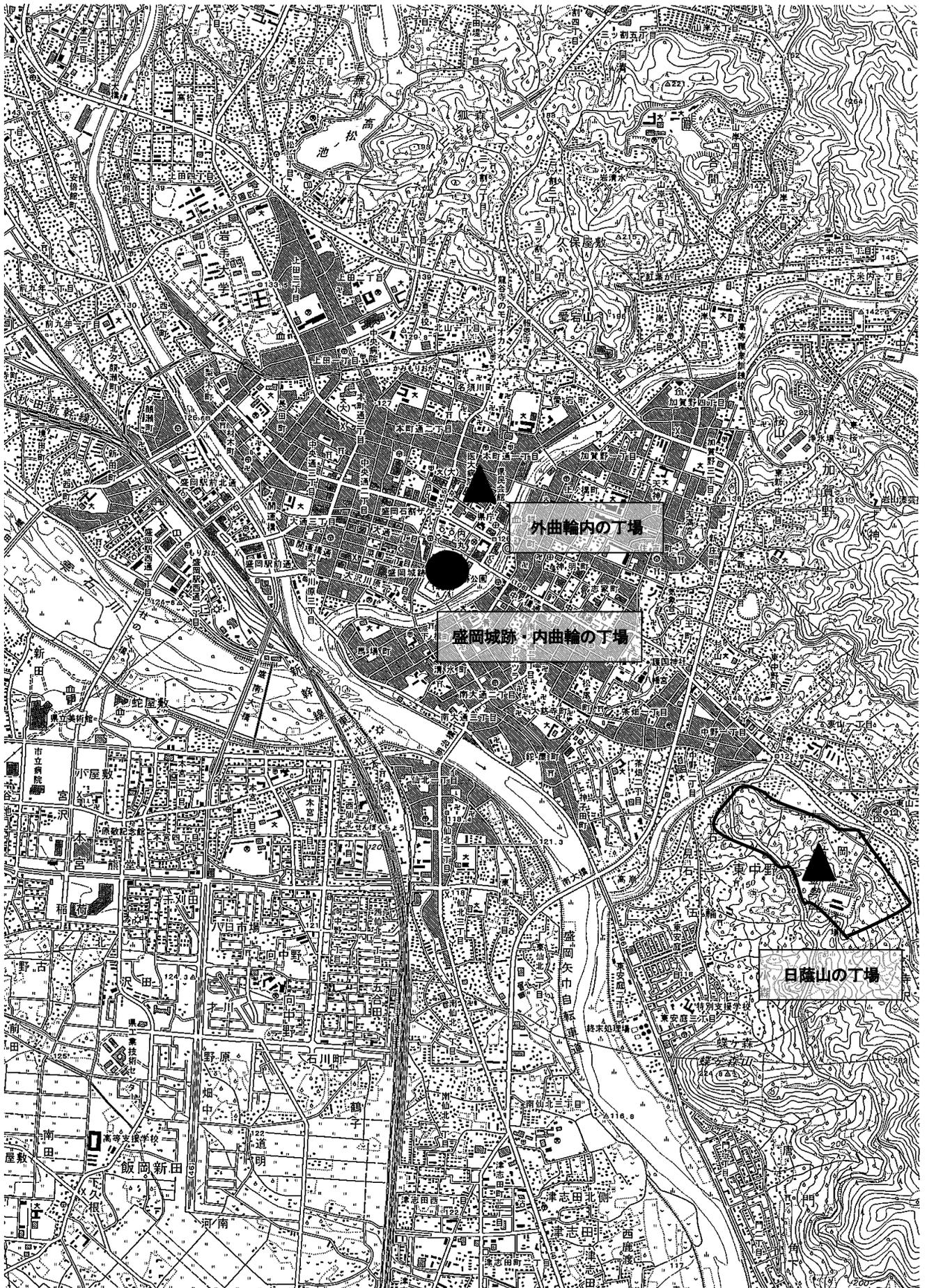
表2 盛岡城など石材に関する記事

<p>◎ 雪の中の石材運搬記事</p> <p>「御城廻御修補」寛保二(一七四二)年十一月二十一日条</p> <p>一 只今雪之中御城内ニ引入申度旨申出候ニ付 伺之通被仰付 御目付へ申渡之</p>	<p>◎ 石材の切り出し寸法記事</p> <p>「御城廻御修補」元文五(一七四〇)年七月三日条</p> <p>一 八木橋茂兵衛其外石切供相尋候処 前々御普請之節 面式尺四方 扣四尺二切申由得供 此度者五寸相遂吟味候処 石壺ツニ付六百 三十文宛ニテ割出可申旨書付差出候間 右之通申付(略)：</p>	<p>◎ 長岡からの石材運搬記事</p> <p>盛岡藩家老席日記「雑書」 寛文七(一六六七)年八月十五日条</p> <p>一 盛岡御城御普請御入用之石 志和郡之内長岡ヨリ船ニテ御賄候 為奉行遠山次郎左衛門 松岡八左衛門 青木安左衛門 此外御歩行 式人 今日午下刻檣山七左衛門ヲ以被仰付遣</p>	<p>◎ 石材運搬の人数記事</p> <p>「吉凶諸書留御凶事一」 寛文三(一六六三)年二月十五日条</p> <p>一 源秀院様御石塔 石巻より川船ニテ去ル廿三日盛岡広臺寺へ為繕 之候 人足百人</p>
---	--	---	---

- (2) 運搬：修羅・石釣・櫓・大八・地車(台車)・角材・コロ・テコを用い、石曳(道)や舟運により運ぶ。
- (3) 石積：三ノ丸などの城内の普請場。集積場に集められ、休憩場、宿を伴う。
 ※江戸時代の石丁場の場合は、後年の採石や周辺の開発によって、多くが消滅している。先駆的な調査例としては、小豆島・東六甲山麓、東伊豆町などがある。
 ※城郭、大名墓所、瓦窯、石切丁場などの関連遺跡の分布調査(石の露頭・採掘穴等)や刻印石・矢(割)穴石・残石の確認を踏まえ、総合的な重要性の認識と地域と行政の共有化、保存と活用が重要。
- (3) 石垣に用いられた花崗岩
- (1) 中世にブランド石として流通し、御影石・ゴマ石ともいう(神戸市御影町産出に由来)。
- (2) 盛岡近郊から産出される花崗岩は白御影石と言われ、黒い箇所を構成する角閃石が多いのが特徴。「盛岡石」や「盛岡白御影石」といわれる。現在は輸入材が主流。
- (3) 花崗岩の主成分は石英と長石で、他に10%程度の有色鉱物(黒雲母・金雲母等)を含み、全体的に白っぽく見える。黒い部分が角閃石。白い部分が斜長石。

表3 盛岡城近郊の石切丁場

地区	所在地	盛岡城までの距離	時期	内容
盛岡城 (内曲輪)	盛岡市内丸地内	約100m	1500年代末～ 1600年代初	毘沙門橋近くの鶴ヶ池に矢穴のある転石と残石
盛岡城 (外曲輪)	盛岡市中央通、本町通 ほか	約400m	1500年代末～ 1700年代初	外曲輪の堀底から矢穴のある花崗岩を確認
日蔭山(金勢遺跡・見石遺跡)	盛岡市東中野金勢ほか	約3km	1600年代中～ 1700年代中	丘陵の頂部や斜面に矢穴のある花崗岩が露頭
山屋	紫波町山屋字中居地内の標高354mの里山(長塚), 鍛冶小屋の名あり	約19km	1700年代初～ 1800年代中	転石が露頭。矢穴は4～6cm。花崗岩の分布は山祇(やまずみ)神社付近まで
長岡 (八坂神社ほか)	紫波町東長岡字天王、 栃内字中田地内	約14km	1600年代初～ 1600年代中	456号線沿いに花崗岩の残石。矢穴14cm。手水鉢の矢穴は16～18cm
岩清水館	矢巾町大字岩清水地内 (館山)	約14km	1600年代初～ 1600年代中	花崗岩や露頭するに矢穴のある花崗岩
飯岡山	盛岡市上飯岡(飯岡山)	—	1800年代中 (1849年記事)	花崗岩製の宗龍寺十六羅漢の石材採取と運搬記事
白石	盛岡市上米内字白石地内	約10km	不明(中津川護岸の伝承)	築城の際に石材採取の伝承。花崗岩の転石が露頭
高水寺城・ 郡山城	紫波町二日町地内	—	不明	凝灰岩系。矢穴は未確認



第5図 盛岡城跡と市内の石切丁場(1 : 25,000)

(4) 全国の石切丁場

(1) 史跡指定された石丁場

- ・江戸城関連 国指定：小田原市早川石、関白沢支群(梅ヶ窪・箕ヶ窪・姫ノ水)、伊東市石丁場、熱海市中張窪
- ・大阪城関連 国指定：小豆島、東六甲山麓、天狗岩、八人石、豆腐石
- ・大阪城関連 市指定：大串

(2) 石工職人の系譜

- ・織豊期(安土・桃山時代)に活躍した石工の集団で代表的な石工に穴太(あなう)衆がある。主に寺院や城郭などの石垣の施工を行った。石工衆、石垣職人とも称する。穴太衆は、近江の比叡山山麓にある滋賀県大津市坂本穴太(穴太ノ里)の延暦寺と日吉大社の門前町・坂本の近郊の出身。
- ・穴太衆は古墳築造の石工の末裔といわれ、寺院や安土城などの石垣を施工し、織田信長や豊臣秀吉らによって城郭の石垣構築にも携わるようになり、以降は盛岡城をはじめ多くの城の石垣築造に関わったと伝えられる。
- ・代表的な石工に栗田家、後藤家、羽坂家などがあるが、全国の城郭や寺院の石垣修復の技術者の確保と養成、さらには技術の継承が課題となっている。
- ・現在、名古屋城・津山城・鳥取城・松江城・丸亀城・熊本城で石垣修復が行われており、藤造園・和田石材・松浦造園・中村石材の石工が携わっている。

(3) 近世城郭の石切丁場

- ・「石切場」・「石切丁場」・「石場」・「石丁場」とよばれる石材の産出地は、古文書に記録されている例はかなり少ない。
- ・盛岡城、二本松城、甲府城、龍岡城、姫路城、鳥取城、唐津城のように、城が所在する丘陵に丁場が営まれている例もあるが、城の近郊で石材が産出できない江戸城や大阪城では、各大家の普請により、城の遠方から舟で運ばれている。
- ・江戸城の石垣の伊豆や相模などから調達され、慶長年間には細川忠興、黒田長政、田中忠政、生駒一正、立花宗茂、稲葉典道、伊東祐慶、毛利高成、木下延俊。寛永年間には松平定行、細川忠利、有馬豊氏、山崎家治、稲葉紀通、九鬼久隆、立花宗茂、立花種長、戸川正安、平岡頼資、桑山一玄、が宇佐美で採石を行っている。

山中には「**羽柴越中守石場**」の標識石が残されており、地区の分担が行われ石材の切り出しが行われていたことが伺える。また、石曳道や採掘孔も残されている。

- ・大坂城の多くの花崗岩は、生駒山や六甲山、または瀬戸内海の島々から運んだ。花崗岩で覆われている小豆島や犬島は、石材の供給地であった。

(4) 石材による耐久性

- ・全国の城郭で石垣修復での新補石材への交換率は、凍結凝灰岩製の小峰城の石垣で4割。結晶片岩・和泉砂岩製の和歌山城の石垣で約7割であるが、花崗岩製の盛岡城の石垣では1割未満となっている。石垣築造にあたって花崗岩の石材は所望されていたが今日、全国の石垣修復では新補石材の確保が課題となっており、**花崗岩の耐久性**があらためて見直されている。なお、西日本の花崗岩は東日本の花崗岩に比べて軟質であるとの評価がある。

表4 近世城郭の石切丁場

	城郭名	都道府県	石切丁場	石材
1	五稜郭跡	北海道函館市	函館山，七飯町，有珠郡壮瞥町	安山岩，凝灰岩
2	弘前城跡	青森県弘前市	石森(長勝寺南西)，兼平，如来瀬(岩木山麓)	安山岩(輝石安山岩)
3	盛岡城跡	岩手県盛岡市	城内，中央通，日陰山，白石，岩清水，山屋	花崗岩
4	花巻城跡	岩手県花巻市	五大堂(伝承：石鳥谷町)，小山田(伝承承：東和町)	花崗岩
6	山形城跡	山形県山形市	馬見ヶ先川河川域(想定)	安山岩， 花崗岩 ，流紋岩
7	仙台城跡	宮城県仙台市	国見(推定)	玄武岩，玄武岩質安山岩
8	白石城跡	宮城県白石市	石倉山(伝承)	安山岩，玄武岩
9	二本松城	福島県二本松市	城内(推定)	花崗岩 ，安山岩
10	小峰城跡	福島県白河市	羅漢山，文殊山(伝承)	凍結凝灰岩
11	笠間城跡	茨城県笠間市	佐伯山(推定)	花崗岩 ，頁岩，砂岩
12	江戸城跡	東京都千代田区	小田原市早川石丁場群(関白沢支群(梅ヶ窪・箕ヶ窪・姫ノ水)，伊東市石丁場(国)，熱海市中張窪石丁場(国))	安山岩，凝灰岩等(伊豆石)
13	村上城跡	新潟県村上市	柏尾	黒雲母流紋岩
14	高岡城跡	富山県高岡市	七尾市庵町白鳥，氷見市蛇が島	砂岩，安山岩，流紋岩
15	富山城跡	富山県富山市	早月川，常願寺川，石動山麓，海岸部	花崗岩 ，安山岩石灰質砂岩
16	金沢城跡	石川県金沢市	戸室山	黒雲母角閃石閃安山岩，溶結凝灰岩
17	甲府城跡	山梨県甲府市	城内，愛宕山麓	安山岩
18	上田城跡	長野県上田市	太郎山山中	緑色凝灰岩
19	龍岡城跡	長野県佐久市	城近郊(第一石切丁場，第二石切丁場)	凍結凝灰岩
20	駿府城跡	静岡県静岡市	藁科川流域，長尾川流域，大崩海岸，伊豆	角礫岩，凝灰岩，砂岩，安山岩
21	名古屋城跡	愛知県名古屋市	岩崎山，海上の森，三国山，知多半島，西尾市ほか	花崗岩 ，花崗閃緑岩，砂岩，凝灰岩ほか
22	大坂城跡	大阪市大阪市	小豆島(国)，東六甲山麓(国)，天狗岩(国)，八人石(国)，豆腐石(国)，大串(市)加茂，笠置，瀬戸内海の島，大津島ほか	花崗岩 主体
23	和歌山城跡	和歌山県和歌山市	天妃山，虎島	結晶片岩，和泉砂岩
24	出石城跡	兵庫県豊岡市	有子山麓	流紋岩， 花崗岩
25	姫路城跡	兵庫県姫路市	鬘櫛山，広嶺～増井山	凝灰岩，頁岩， 花崗岩 ，砂岩
26	利神城跡	兵庫県佐用町	西山山腹	安山岩，流紋岩，溶結岩質多結晶凝灰岩，変質凝灰岩
27	鳥取城跡	鳥取県鳥取市	城内山頂，二ノ丸	花崗斑岩，玄武岩， 花崗岩
28	津和野城跡	島根県津粟野町	舂峠，上寺田，喜時雨，陶ヶ岳	ひん岩，石英閃緑岩，頁岩，角閃岩安山岩
29	津山城跡	岡山県津山市	大谷山，金屋山	凝灰岩
30	備中松山城	岡山県高梁市	臥牛山	花崗岩
31	高松城跡	香川県高松市	屋島	花崗岩 ，安山岩，凝灰岩
32	丸亀城跡	香川県丸亀市	塩鮑諸島	花崗岩 ，安山岩
33	名護屋城跡	佐賀県唐津市，玄海町	城跡周辺	玄武岩
34	唐津城跡	佐賀県唐津市	城内，鳥島，松浦川下流	花崗閃緑岩，玄武岩
35	島原城跡	長崎県島原市	宇土山	角閃石安山岩

3 紫波町の歴史的環境

(1) 紫波町内の遺跡 351 か所(県台帳・以下は代表的な遺跡)

- (1) 縄文時代：西田，舟久保洞窟
- (2) 古 代：杉ノ上窯跡，杉上Ⅰ，杉上Ⅱ，中田Ⅰ・中田Ⅱ，田面木Ⅰ
- (3) 中 世：陣ヶ丘，鎌倉街道，東道，比爪館，長岡館，柳田館，大巻館，善知鳥館，佐比内館，高水寺
- (4) 近 世：郡山城 承慶橋，北上川の渡し，川原毛窯跡，奥州街道(道中)，武田家住宅
- (5) 近 代：平井家住宅・庭園，旧紫波郡役所庁舎など

(2) 指定文化財

(1) 国指定文化財：3件

- ・平井家住宅(日詰)
- ・勝源院の逆ガシワ(日詰)
- ・**山屋の田植踊(山屋)**

(2) 岩手県指定文化財：8件

- ・舟久保洞窟(舟久保・縄文時代)
- ・川原毛瓦窯跡(二日町・江戸時代)
- ・不動明王絵像碑(南日詰・鎌倉時代)
- ・木造七仏薬師如来立像(赤沢・平安時代)
- ・木造十一面観音立像(平安時代)
- ・木造毘沙門天立像(赤沢・平安時代(平安時代))
- ・木造降三世明王像外(平安時代)
- ・犬吠森念仏剣舞(草刈)

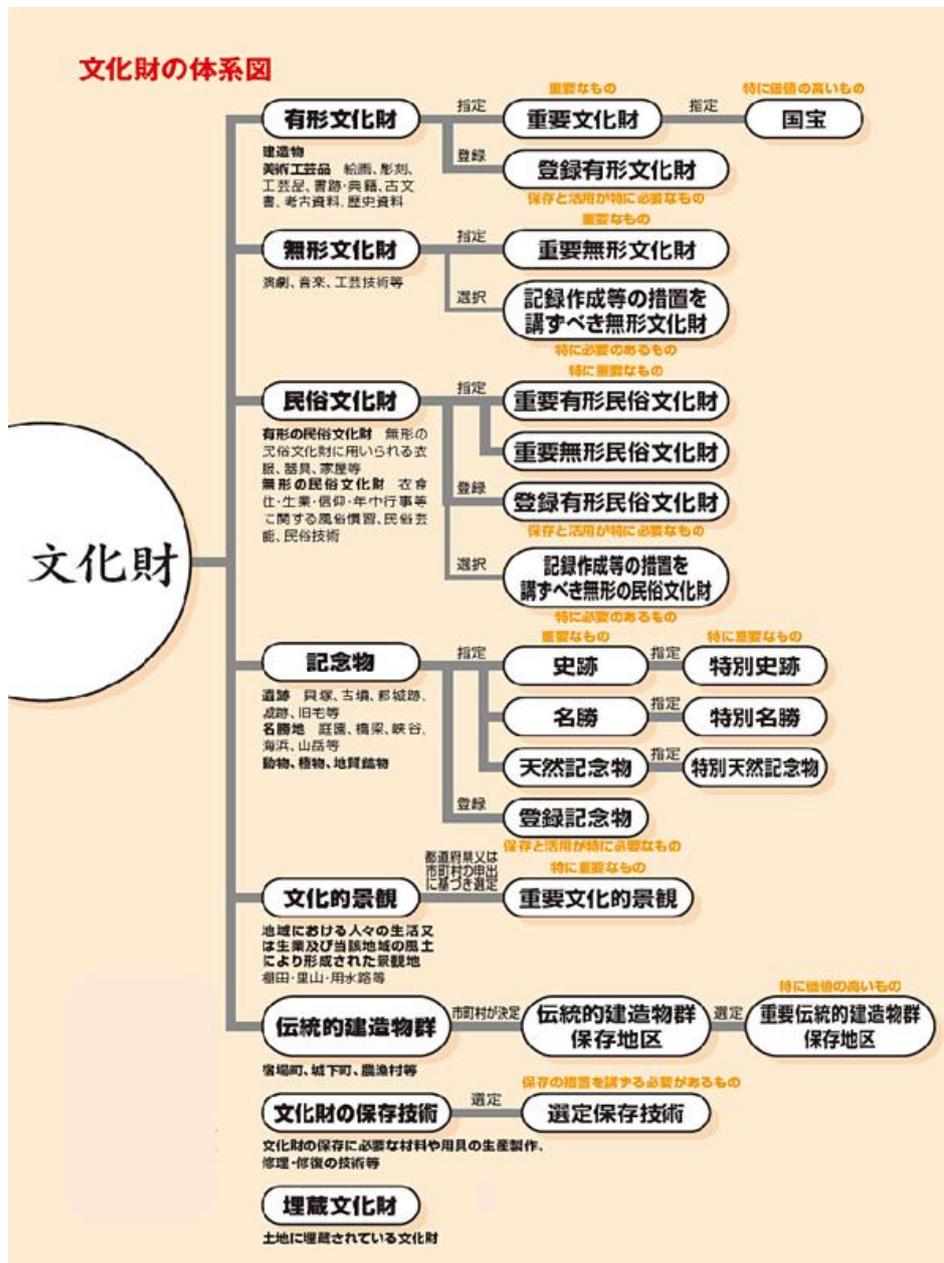
(3) 紫波町指定文化財：23件

- ・比爪館(南日詰)
- ・高水寺城(二日町)
- ・是信房墓所(彦部・中世)
- ・武田家住宅(上松本・明和3年)
- ・旧紫波郡役所庁舎(日詰・明治30年)
- ・キリシタン墓碑(佐比内・江戸時代)
- ・南日詰乾元二年碑(南日詰・幹元2年)
- ・犬渕暦応四年碑(犬渕・暦応4年)
- ・**東長岡永仁三年碑(東長岡・永仁3年)**
- ・正音寺銅鐘(遠山，寛永20年)
- ・木造地藏菩薩半跏像(遠山・江戸時代)
- ・木造金剛界大日如来像(江戸時代)
- ・木造准胝観世音菩薩座像(土館・江戸時代)
- ・二日町嘉元三年碑鑄造(二日町・嘉元3年)
- ・千手観世音菩薩座像(南日詰・室町時代)

- ・水分神社のスギ群（小屋敷）
- ・御神明のカツラ（佐比内）
- ・走湯神社のケヤキ（二日町）
- ・木宮神社のケヤキ群（二日町）
- ・山屋のサワラ（山屋）
- ・八坂神社のナラカシワ（東長岡）
- ・大巻のイチイ（大巻）
- ・大巻のアサダ大峯のカリン（大巻）

(3) 指定文化財の意義と地域の魅力の創出

(1) 国や地方自治体が指定・登録・或いは選定している文化財は、国や地域にとっての成り立ちや文化を知るうえで欠くことのできない貴重な財産であることから、次世代にわたって良好な状態で引き継ぐことを前提としている。

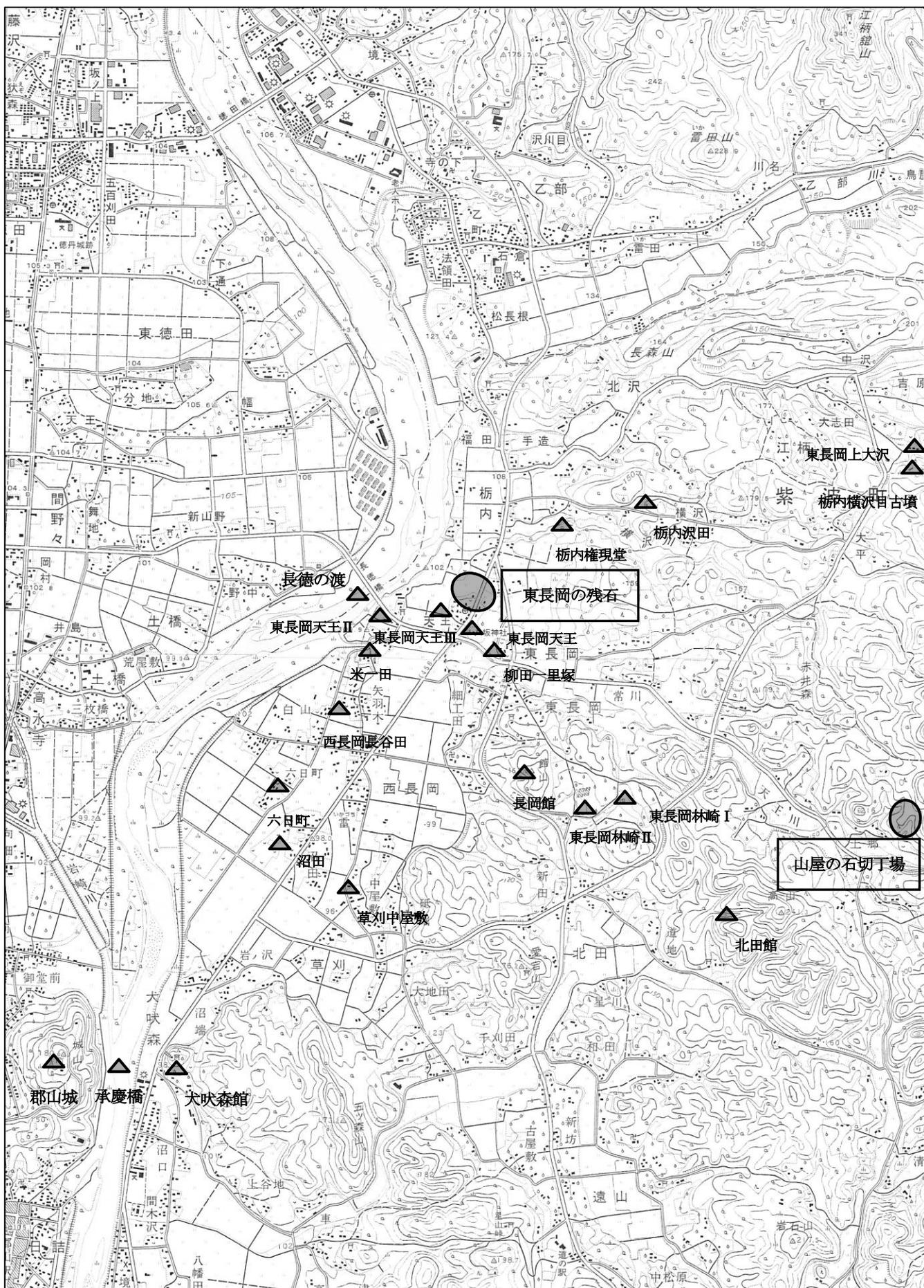


(文化庁HPより)

- (2) 紫波町内の指定文化財34件の傾向は、史跡5件(県2, 町3), 名勝0件, 天然記念物9件(国1, 町8), 建造物3件(国1, 町2), 美術品15件(県5, 町10), 民俗文化財2件(国1, 県1)となっており, 石碑やなどの記念碑や仏像などの美術品の指定が多いのが特徴。
- (3) 紫波町内の文化財指定の傾向は, 石碑やなどの記念碑や仏像などの美術品の指定が多いことが特徴。そのほかにも指定して保存が図られるべき文化財も多い。今後とも行政と地域が一体となった保護と活用が必要。
- (4) 長岡には山屋の石切丁場などのように新たな歴史的文化的遺産の発見により, その地域の特徴の把握にとどまらず, より広域的で永続的な地域への理解を増すことにつながる。
- (5) 地域の魅力は, 史跡だけでなく, 名勝, 天然記念物, 建造物, 美術品, 民俗文化財や文化的景観など, 様々な要素の複合体によって魅力と個性が保たれていることから, 絶えず地域の個性と魅力を見直し, 評価することが地元の活性化と地域力につながる。

表5 長岡周辺の遺跡

No.	遺跡名	時代・内容	遺構・遺物	備考
1	郡山城	近世・城館跡	堀・郭	
2	承慶橋	近世・橋跡	中島	
3	長岡城(館)	中世・城館跡	堀・郭	昭和50年町史跡
4	北田館	中世・城館跡	堀・郭	
5	犬吠森館	中世・城館跡	堀・郭	
6	東長岡天王	縄文, 散布地	縄文土器	
7	東長岡天王Ⅱ	奈良・平安, 散布地	土師器	
8	東長岡天王Ⅲ	古代・集落跡	—	
9	東長岡林崎Ⅰ	古代, 散布地	縄文土器・土師器・須恵器	
10	東長岡林崎Ⅱ	縄文・古代, 散布地	縄文土器・土師器・須恵器	
11	東長岡上大沢	縄文, 散布地	縄文土器	
12	西長岡長谷田	奈良・平安, 集落跡	土師器・須恵器	
13	沼田	奈良・平安, 散布地	土師器・須恵器	
14	米一田	奈良・平安, 散布地	土師器	
15	六日町	奈良・平安, 散布地	土師器	
16	草刈中屋敷	縄文・平安, 散布地	縄文土器・土師器	
17	柳田一里塚	近世・一里塚	—	消滅
18	栃内横沢目古墳	古代・古墳	—	
19	栃内沢田	縄文・古代, 散布地	縄文土器・土師器・須恵器	
20	栃内権現堂	縄文・奈良, 散布地	縄文土器・土師器	
21	山屋館経塚	中世	塚・経筒	平成2年県有形・平成21年県史跡



第6図 長岡地区の主な遺跡と山屋の石切丁場(1 : 25,000)

表6 江戸時代の年号

NO. 1・似内															
和暦	干支	西暦	当主	和暦	干支	西暦	当主	和暦	干支	西暦	当主	和暦	干支	西暦	当主
慶長3	戊戌	1598	信直	延宝5	丁巳	1677		寛保2	壬戌	1742		文化4	丁卯	1807	
5	庚子	1600	利直	6	戊午	1678		3	癸亥	1743		5	戊辰	1808	
19	甲寅	1614		7	己未	1679		延享元	甲子	1744		6	己巳	1809	
元和元	乙卯	1615		8	庚申	1680		2	乙丑	1745		7	庚午	1810	
2	丙辰	1616		天和元	辛酉	1681		3	丙寅	1746		8	辛未	1811	
3	丁巳	1617		2	壬戌	1682		4	丁卯	1747		9	壬申	1812	
4	戊午	1618		3	癸亥	1683		寛延元	戊辰	1748		10	癸酉	1813	
5	己未	1619		貞享元	甲子	1684		2	己巳	1749		11	甲戌	1814	
6	庚申	1620		2	乙丑	1685		3	庚午	1750		12	乙亥	1815	
7	辛酉	1621		3	丙寅	1686		宝暦元	辛未	1751		13	丙子	1816	
8	壬戌	1622		4	丁卯	1687		2	壬申	1752	利雄	14	丁丑	1817	
9	癸亥	1623		元禄元	戊辰	1688		3	癸酉	1753		文政元	戊寅	1818	
寛永元	甲子	1624		2	己巳	1689		4	甲戌	1754		2	己卯	1819	
2	乙丑	1625		3	庚午	1690		5	乙亥	1755		3	庚辰	1820	
3	丙寅	1626		4	辛未	1691		6	丙子	1756		4	辛巳	1821	利用
4	丁卯	1627		5	壬申	1692	行信	7	丁丑	1757		5	壬午	1822	
5	戊辰	1628		6	癸酉	1693		8	戊寅	1758		6	癸未	1823	
6	己巳	1629		7	甲戌	1694		9	己卯	1759		7	甲申	1824	
7	庚午	1630		8	乙亥	1695		10	庚辰	1760		8	乙酉	1825	利濟
8	辛未	1631		9	丙子	1696		11	辛巳	1761		9	丙戌	1826	
9	壬申	1632	重直	10	丁丑	1697		12	壬午	1762		10	丁亥	1827	
10	癸酉	1633		11	戊寅	1698		13	癸未	1763		11	戊子	1828	
11	甲戌	1634		12	己卯	1699		明和元	甲申	1764		12	己丑	1829	
12	乙亥	1635		13	庚辰	1700		2	乙酉	1765		天保元	庚寅	1830	
13	丙子	1636		14	辛巳	1701		3	丙戌	1766		2	辛卯	1831	
14	丁丑	1637		15	壬午	1702	信恩	4	丁亥	1767		3	壬辰	1832	
15	戊寅	1638		16	癸未	1703		5	戊子	1768		4	癸巳	1833	
16	己卯	1639		宝永元	甲申	1704		6	己丑	1769		5	甲午	1834	
17	庚辰	1640		2	乙酉	1705		7	庚寅	1770		6	乙未	1835	
18	辛巳	1641		3	丙戌	1706		8	辛卯	1771		7	丙申	1836	
19	壬午	1642		4	丁亥	1707		安永元	壬辰	1772		8	丁酉	1837	
20	癸未	1643		5	戊子	1708	利幹	2	癸巳	1773		9	戊戌	1838	
正保元	甲申	1644		6	己丑	1709		3	甲午	1774		10	己亥	1839	
2	乙酉	1645		7	庚寅	1710		4	乙未	1775		11	庚子	1840	
3	丙戌	1646		正徳元	辛卯	1711		5	丙申	1776		12	辛丑	1841	
4	丁亥	1647		2	壬辰	1712		6	丁酉	1777		13	壬寅	1842	
慶安元	戊子	1648		3	癸巳	1713		7	戊戌	1778		14	癸卯	1843	
2	己丑	1649		4	甲午	1714		8	己亥	1779		弘化元	甲辰	1844	
3	庚寅	1650		5	乙未	1715		9	庚子	1780	利正	2	乙巳	1845	
4	辛卯	1651		享保元	丙申	1716		天明元	辛丑	1781		3	丙午	1846	
承応元	壬辰	1652		2	丁酉	1717		2	壬寅	1782		4	丁未	1847	
2	癸巳	1653		3	戊戌	1718		3	癸卯	1783		嘉永元	戊申	1848	利義
3	甲午	1654		4	己亥	1719		4	甲辰	1784	利敬	2	己酉	1849	利剛
明暦元	乙未	1655		5	庚子	1720		5	乙巳	1785		3	庚戌	1850	
2	丙申	1656		6	辛丑	1721		6	丙午	1786		4	辛亥	1851	
3	丁酉	1657		7	壬寅	1722		7	丁未	1787		5	壬子	1852	
萬治元	戊戌	1658		8	癸卯	1723		8	戊申	1788		6	癸丑	1853	
2	己亥	1659		9	甲辰	1724		寛政元	己酉	1789		安政元	甲寅	1854	
3	庚子	1660		10	乙巳	1725	利視	2	庚戌	1790		2	乙卯	1855	
寛文元	辛丑	1661		11	丙午	1726		3	辛亥	1791		3	丙辰	1856	
2	壬寅	1662		12	丁未	1727		4	壬子	1792		4	丁巳	1857	
3	癸卯	1663		13	戊申	1728		5	癸丑	1793		5	戊午	1858	
4	甲辰	1664	重信	14	己酉	1729		6	甲寅	1794		6	己未	1859	
5	乙巳	1665		15	庚戌	1730		7	乙卯	1795		萬延元	庚申	1860	
6	丙午	1666		16	辛亥	1731		8	丙辰	1796		文久元	辛酉	1861	
7	丁未	1667		17	壬子	1732		9	丁巳	1797		2	壬戌	1862	
8	戊申	1668		18	癸丑	1733		10	戊午	1798		3	癸亥	1863	
9	己酉	1669		19	甲寅	1734		11	己未	1799		元治元	甲子	1864	
10	庚戌	1670		20	乙卯	1735		12	庚申	1800		慶応元	乙丑	1865	
11	辛亥	1671		元文元	丙辰	1736		享和元	辛酉	1801		2	丙寅	1866	
12	壬子	1672		2	丁巳	1737		2	壬戌	1802		3	丁卯	1867	
延宝元	癸丑	1673		3	戊午	1738		3	癸亥	1803		明治元	戊辰	1868	利恭
2	甲寅	1674		4	己未	1739		文化元	甲子	1804		2	己巳	1869	
3	乙卯	1675		5	庚申	1740		2	乙丑	1805		3	庚午	1870	
4	丙辰	1676		寛保元	辛酉	1741		3	丙寅	1806		4	辛未	1871	